11『福音について』（浅田次郎）

　　―幼かった昔、長い休みに入ると、いつも山奥の母の実家へ行った。大勢のいとこたちが　 あちこちから集まり、一緒に遊んだ。ある時、山を歩き……。

　門前のみやげ物屋で、それぞれがアメ玉やチューインガムを買った。伯父からった十円玉は、今日の百円ぐらいに相当したであろうか。ともかくけっこうな小遣いであった。

ところが、いざ買い物をしようとすると、私の十円玉が見当たらない。どうやら山歩きの最中に、どこかで落としてしまったらしかった。探しに戻ろうにも深い山道である。私は石段の中途に膝を抱えて泣いた。いとこたちはみなアメ玉をなめながら屋敷に帰ってしまった。

ただひとり、ひとつ年長のいとこが泣きくれる私を励ましながら、①見つかるはずもない十円玉を②けんめいに探してくれていた。

いとこの名はヒロシといった。きかん坊ばかりのいとこたちの中で、彼だけは［　Ⅰ　］でもの静かな子どもだった。その性格はたぶん、物心つかぬうちに父親――すなわち私の母の兄と死に別れていたせいかもしれない。おしなベて幸福な家庭に育った他のいとこたちに比べ、彼だけはまちがいなく、苦労の分だけ大人びていた。

私は日ごろから泣かぬ子どもだった。その私が膝を抱えて泣いたのはたぶん、十円玉を落としたからではないと思う。夕闇の迫る神社の、はるかな石段を行きつ戻りつして私の十円玉を探してくれているヒロシの、愚直なまでのやさしさに泣かされたのであろう。

山奥の冬のは、るべ落としに暮れてしまった。

　「③あったよ！　ジロウ、あった、あった。」ヒロシはそう言って、私に十円玉を握らせた。とたんに私は、ヒロシのやさしい笑顔を正視できずに、声を上げて泣いた。子ども心にも、その十円玉の出所がわかったからである。それはヒロシのポケットの中の十円玉にちがいなかった。ヒロシは拒否する言葉も思いつかぬ私をみやげ物屋まで連れて行き、私の欲しそうなものを買った。

「ほら、食べろよ。もう泣くなって。」「ヒロシちゃんは？」「④おれは食べたくない。もうすぐごはんだから。」

＊の帰り道で、ヒロシは泣きやまぬ私の手をずっと握っていてくれた。私が小学校一年、ヒロシは二年生だったろうか。ヒロシはそんな少年だった。

＊語注

＊つるべ落とし…つるべ（水をくむ容器）が急に井戸の中に落ちることから、あっという間に日が沈むことの形容。

＊木下闇…木の葉が茂って日光をさえぎるため、木の下がほの暗いこと。

問１　――線部①について、「私」が「見つかるはずもない」と思ったのはなぜか。その理由となる、連続する二文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問２　――線部②について、「けんめい」さが具体的に書かれている部分を文中から二四字で抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問３　［　］Ⅰに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　温厚　　イ　温暖　　ウ　慎重　　エ　冷静

問４　――線部③と言って、「ヒロシ」が十円玉を探すのをやめたのはなぜか。適当なものを次から二つ選び、記号を○で囲め。

ア　見つかるはずもない十円玉が、見つかったから。

イ　日が暮れて、落とした十円玉を探すのが難しくなってきたから。

ウ　神社の長い石段の上り下りで、疲れてしまったから。

エ　いつまでも泣きやまない「私」を、とにかく黙らせたかったから。

オ　「私」の悲しみをこれ以上長引かせないようにしようと思ったから。

問５　――線部④と言ったのはなぜだと考えられるか。具体的に三〇字以内で述べよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　「ヒロシ」の「やさしさ」が読みとれる行為はいくつ描かれているか。漢数字で答えよ。

〔　　　〕

【解答】

問１　どうやら山

問２　夕闇の迫る

問３　ア

問４　イ・オ

問５（例）十円玉を「私」に渡してしまって、お金がなくなっているから。（29字）（自分の十円玉を渡したことを「私」に悟らせないようにするため。（30字））

問６　四

ポイント

問１　深い山道歩きの最中に、落としてしまったらしい、と前段落にある。

問５　ヒロシは自分の十円玉を「私」に渡してしまっている。

問６　１：十円玉を探してくれた。　２：自分の十円玉を「あった」と言って、握らせてくれた。　３：私をみやげ物屋まで連れて行き、私の欲しそうなものを買った。　４：私の手をずっと握っていてくれた。